発刊にあたって

私が循環器画像技術分野の仕事に携わって，かなりの年月が経過し，それは30年近くになろうとしています．しかし，心臓におけるカテーテル治療の歴史をひも解くと，実はさらに古いことがわかります．

1929年，ドイツ出身のヴェルナー・フォルスマンが自分の腕を切開し，尿カテーテルを自身の右心房まで通しました．それから20年が経過した1977年，チューリッヒ大学に勤めていたドイツ人，グルンツィッヒ医師によりカテーテル治療（バルーンカテーテル法）が実際に人に施行されました．その後，1986年にはステントがはじめて人に留置され，2002年には薬剤溶出ステントが使用されるようになりました．最初にカテーテルが人の心臓に届いてから80数年です．

医師をはじめとしたメディカルスタッフ，装置や医薬品，そして数々のデバイスを開発してきたメーカの方々といった先人たちのたゆまぬ努力と治療への信念の上に確立してきた今日の医療技術の進歩は実に目覚しいものがあります．

私は，これらの歴史のわずかな頁を知るに過ぎませんが，それでも，PTCRからPTCA，そしてPCIへ，またそれらに伴った手技，撮影法，装置などの変遷，また技術向上，放射線防護技術の進歩，装置の開発，アナログからデジタルへの移行，造影剤の進化，CTやMRIの心臓への応用，そして数々のデバイスの開発など，時代とともに経験し現在に至っています．

そしてこの度，私が長きにわたり教え導いていただいた循環器画像技術研究会が発足30周年を迎えるにあたり，本研究会でこれまで培ってきた画像技術の集大成として『心血管画像技術　完全ガイドブック』の出版を企画させていただきました．

内容は，カテ室の設計からはじまり，装置器材・周辺機器，虚血性心疾患，弁膜疾患，先天性疾患，冠動脈疾患，PCI，アブレーション，心血管撮影技術，患者安全，ネットワークシステムと管理，被ばく管理，感染対策・医療安全・チーム医療，そして読影の補助に繋がる臨床技術，症例提示によるテクニカルデスカッション等について，詳細にかつ解りやすくまとめました．

各パートを担当した執筆者は，本研究会の幹事であり，それぞれに各施設で医療の最前線で活躍される選りすぐりのスペシャリストの皆さんです．

本書が，循環器画像技術分野のみならず，チーム医療を含めた，臨床・教育・研究において，医療の現場で，また教育現場で，できるだけ多くのメディカルスタッフの方々に活用いただければ，企画者のひとりとして喜ばしい限りであります．

最後に，執筆いただいた皆様，そして発刊に際してご支援とご協力を頂いた多くの方々に厚く御礼を申し上げます．

2014年1月吉日

循環器画像技術研究会
会長　加藤　京一
（昭和大学大学院保健医療学研究科教授）